

巻 頭 言

精神医学のグローバル化と英文学術雑誌

武田雅俊 日本精神神経学会理事
Masatoshi Takeda

学術領域のグローバル化が進行している。精神科医の多くは、インターネットで情報を探索し、メールで情報を交換し、オンラインジャーナルから最新の情報を入手する。情報のグローバル化は同時に原著論文の取り扱いにも変化をもたらしつつある。論文は英文で発表することが求められるようになり、極端な場合には英文以外の言語で発表された論文についてはそのプライオリティを認めない場合さえありうる。このような学術領域のグローバル化を踏まえて、日本精神神経学会では2008年から英文機関誌を刊行することになった。

英文学会誌の準備は5年前に遡る。山内俊雄前理事長の時、理事会において英文学会誌の刊行が決定され、作業部会が立ち上げられて以来、どのような英文誌を作り上げるかについて熱心に議論されてきた。そして2006年度総会において英文機関誌の刊行が承認された。そして、英文誌作業部会が正式に発足し、我が国からの独創性の高い研究成果を発表すること、我が国独自の問題について世界に発信すること、特に若手研究者やアジアの研究者による論文の発表に役立てることなど、英文機関誌が担うべき役割について検討が進められ、具体的な編集方針についても議論されてきた。一言で言えば、アジア発の世界一流の精神医学雑誌を作ろうという高い志であった。

そのような中でPsychiatry and Clinical Neurosciences (PCN) 誌との合併の話が持ち上がってきた。ご承知のとおりPCN誌は我が国を代表する精神医学領域の英文学術雑誌であり、本多裕先生を会長とするフォリア刊行会が刊行母体となり、高橋三郎先生と栗田広先生とを編集委員長とする隔月刊の学術雑誌である。最新のインパクトファクター(2006年度)は1.132であり、国際的な精神医学雑誌の一つとして認知されている。

PCN誌は長い間フォリア誌として親しまれてきたが、その歴史は、1933年に林道倫(岡山)、中村隆治(新潟)、斉藤玉雄(東京)、植松七九郎(東京)、内村祐之(東京)が発起人となりFolia Psychiatrica et Neurologica Japonica(フォリア誌)が創刊されたことに始まる。戦争

による休刊の時期があったが、1947年に上村忠雄教授によりVol.2が復刊され、1953年(Vol.7)に日本精神神経学会による刊行となった。1964年から秋元波留夫東京大学教授が編集主幹となり編集事務局が東大精神医学教室内の学会事務所へ移動した折に、フォリア刊行会が創立された。1968年フォリア誌は正式に学会の欧文機関誌となり、精神神経学雑誌にフォリア誌の和文抄録が掲載されるようになり、欧文のフォリア誌と和文の精神神経学雑誌とを機関誌とする体制ができて上がった。ところが、1975年に学会理事会はフォリア誌を学会機関誌からはずすことを決定し、以降はフォリア刊行会が独立して刊行を続けられてきた。1986年に雑誌名がThe Japanese Journal of Psychiatry and Neurologyに変更され(Vol.40~48)、さらに、1995年には現在のPsychiatry and Clinical Neurosciencesに変更された(Vol.49~)。1995年から本多裕先生がフォリア刊行会会長と編集委員長を勤められ、2000年から高橋三郎先生が編集委員長を、そして2006年からは栗田広先生が編集委員長に加わられて現在の体制になった。このような歴史を振り返ると、PCN誌はもともと学会と深い関係を有していたといえよう。

このたび、フォリア刊行会との話し合いがまとまり、PCN誌が日本精神神経学会による学会誌へ移管されることになった。PCN誌の歴史を顧みると、本来のあるべき姿に戻ったということもできるかもしれない。これからPCN誌編集委員会と学会英文誌作業部会とが定期的な協議を重ねていき、学会機関誌としてのPCN誌をどのように発展させるかを議論していくことになる。雑誌の運営方針、編集体制、投稿規定などが議論され、今まで以上により雑誌を作り上げて行く作業が開始されている。学会機関誌としてのPCN誌は、学術領域のグローバル化に対応してアメリカ、ヨーロッパ、アジアの三極の一翼を担う精神医学領域の重要な雑誌としてさらなる発展を遂げるであろう。2008年の第62巻から、新しい学会機関誌としてのPCN誌が刊行される予定である。